

御届明治四十年十月廿二日

鬼平金四郎編輯

日光山名細記

金魁堂



我國小諸地種家あり  
其地多し海東一帯の地  
日之山多し人亦多し利  
後と美御山少くも  
徳也

の其<sup>ゆゑ</sup>主<sup>しゅ</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>ち<sup>ち</sup>一<sup>いつ</sup>部<sup>ぶ</sup>屋<sup>や</sup>公<sup>こう</sup>  
 の能<sup>よ</sup>始<sup>し</sup>め<sup>め</sup>を<sup>を</sup>利<sup>り</sup>益<sup>えき</sup>を<sup>を</sup>業<sup>ぎやう</sup>に<sup>に</sup>属<sup>ぞく</sup>せ<sup>せ</sup>  
 能<sup>よ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>め<sup>め</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>其<sup>その</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>を</sup>  
 人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>代<sup>だい</sup>り<sup>り</sup>に<sup>に</sup>任<sup>にん</sup>じ<sup>じ</sup>ん<sup>ん</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>  
 とな<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>年<sup>ねん</sup>に<sup>に</sup>始<sup>し</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>

形<sup>かたち</sup>ふ<sup>ふ</sup>ん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>集<sup>あつ</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>冊<sup>さつ</sup>子<sup>し</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>  
 所<sup>ところ</sup>を<sup>を</sup>識<sup>し</sup>者<sup>じや</sup>が<sup>が</sup>少<sup>すく</sup>く<sup>く</sup>な<sup>な</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>よ<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>  
 して<sup>て</sup>其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>  
 其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>  
 其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>  
 其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>

世におふと世の行くも  
 ともなげを法冊子なり  
 こそしるしとあふかひふ  
 藤と法とあふらん  
 仲の句の

日光山名細記

わたなべ

都賀郡日光山へ入王四十八代称徳天皇  
 乃神護景雲元年勝道上人法開基あり

上人の御芳名都室乃八幡はく法誕生法定を  
 垂仁帝第九の皇子卷向れ尊十有余代の孫若田氏

高の藤磨とのく皇母へ正三位左大臣吉田清磨は  
 息女あり父母嘗て子形さ申をあげき門國は流山

平手大士小緒くいのりくるふり七日小満

夜八葉の蓮華のおとらりのれ中ふるふふく  
 纏ゆる環れやう形も物もふえくかき覚へくそま  
 より懐妊一上人を生給ふまゐりち夢乃告ふありひ合  
 て雅名をりるふ丸と号治ふ一ふ上人知立具見  
 一七佛教不志ぬく砂をわつめおをわつめも堂塔を  
 建立のころまふかん好ま治りゆく長ふりて出院の  
 祝音ふふふりく種と勤行のうちこびくふ思儀乃  
 清告ありく日光山開創れことと心管一立治り

廿七歳乃治河内國業師古ゆく得成りむか  
 それより程程よく平素乃志を道人とてあゆ  
 至り本宮四奉龍寺清建立ゆくそ境中禪寺  
 自余乃具社くと造宮あり於年ありて弘法師  
 慈覺大師登山未終ひ不くに堂社成建治ふかて  
 星霜八百余載乃後元和に慈眼大師中興法開  
 山としてお母を祀るも  
 東照大権現高山小浜鎮社ありてふふ抱成

物一と云々神威海内不懸一物も編み其山の籠  
 倫ふよる月のありて之を泰緒乃家緇素群と云々  
 以ども不之乃堂社回跡未甚便際を尋得は且泰  
 緒の志一切にて来る事叶きるものもあん  
 那をとい一冊を求く容易其地を耕し来く  
 遠近乃後死と云那うんとあらく一書不修り  
 七名細純と号りの多利

日光山名細記

○神社佛閣

○名所舊跡

△日光山入口町筋 今市より日光と三里の所並松

人里成通りるに本戸口と云く ○松原町を三丁を越り

○石屋町を三丁改東側小 ○瑞雲山龍花寺

ゆふちあり寺内小三十三観音を安並に中なる八巻

覚大師一刀之札乃此佛之並希放天堂慈心の也作

あり此寺下野坂東三十三番の札所とされたり○此濟  
この寺は幸町と云ふ東側中程小橋荷町への橋乃あり此町と云ふ  
そのまは幸町中程小橋と云ふあり石剱象神奉地虚空蔵菩薩  
なり形り橋のありと云ふあり○此辨之町と云ふ  
この町は此町上中下三つ小別あり下辨之町東側小橋町  
ありあり八七女町と云ふ是より橋の町へ通る辨之町へ出  
てて向ふと云ふは辨之町山觀音寺と云ふ寺と云ふ内山より  
千手觀音堂千手觀音堂一字弘法大師乃濟作あり辨之町

此高不塗物梳折曲柄ありあきまふ店あり右入口  
此松原町より島所出口まゝくおとと町長十三町  
此解のり  
此△下米 此和たの方石厚本を堂王森の内  
此△星宮 辨殿あり幸町へ右臺子取虚空蔵菩薩  
此薩あり月宮乃はと云ふ當所山は出家入峰の寺  
此勅乃乃堂あり星の窟と云ふ毎春極月廿六日  
此右乃行者下と云ふ惟子と云ふ懸一衣にて山杖勅乃乃

年乃二月下旬宿ふか二月三日此初嘗奉之天下安全  
 國土豊饒の所新他國ふか此乃なる荒行あり悉  
 くの死が一日不始もとれ○見目明神  
 ○此ふより東の方のえゆる松山ふか倉山ついで  
 大なる山ふかあふていさより足さの四方ふか  
 く山く増とけりなり

△御山入口 神橋 欄子擬宝珠ありしきも兼堂  
 あり此橋古い山菅乃蛇橋と云用山橋道上人指す

登山の時此川ふかて橋とふか深砂大王忽然や  
 現し青赤の二蛇を放し橋とふか上人例を  
 る山菅と新蛇ふか復ひ渡りてふか山菅ま蛇橋  
 と云中古より神橋と唱ふ橋のゆき折三通  
 わり目光あてハ乳の本とらふ西の橋一乃乳の本  
 引込一なる龍宮一通一より此橋れうちふ社  
 の明神を祝請あるゆかたふ石津のりのま  
 渡さび橋かきか人の時ハ神半法樂法祝式あり

224034

神 橋 滿 願 寺 圖



三 佛 堂

相 輪 塔



竹 葉 土



子 此橋の末に仮橋ありて往來便

○假橋 往來乃人馬あまきと渡る大谷川より川

止へ中禪寺御水の流より内右の方の坂へ東

佛岩谷坂下に

○碑あり是の御神領境より尚右とあり海乃

並板松平右衛門の妻史清寄進の碑あり其石の上

ふえゆるの奉宮の社とを皇より神橋向ふ

○深砂大王の宮 鳥居の額ハ大明院一品准后法親王

の震業あり本地毘沙門天神橋を禊の靈神

△宮幣社東照宮への乃前神橋のたよりを坂と

長坂とのふまき下守御あり内右乃の上小正月一日九月

十七日御祭禮の儀後右あり母あまきと品立の御膳を

備へ伶人音楽を奏しきゆくの所祝式あり

○長坂より中山通り津右院と云寺内小安達氏を九

帝盛長の石塔あり○町表へ通りたの河内園ハ

東照宮所有地なり右のくく旧輪王寺の文とす

此地滿願寺社境内之佛堂山之大伽藍あり  
 間早簡矣以十四間也未嘗少之形也  
 千手馬頭慈覺大師の所作之日光之社の所也地  
 佛之社堂の後ふる大佛堂あり是の採燈の護摩  
 所之并相輪塔の金堂約高サ二丈余約ハ傳  
 教大師六十四句の法苑文を此とて戲山不始り目  
 本全園六ヶ所不建也之是六十餘もの法苑之  
 切徳無盡成を以て慈眼大師崗山不建之

世風小あり人倫ハ去ふおよら鳥獸草木のるる  
 也佛果を得るとさく親をさく一見を結縁と  
 也現在少々の無量の罪を滅ト基深微妙社  
 者ありの由へ疑ありのうへに喬くハ此一  
 鐘樓堂あり白木造り日夜時の音を鳴す  
 尤境内ハ築山有て滝を役け樹木青葉と  
 雅ひ美景を極め遊觀の地ふくく竹心  
 多く閑幽をばし心氣清くくく

諸人の望しきありしなり

○石の島居是の美田筑名も長政筑名

とてく鉅石を削り南海数百里を運ぶ

元和四年卯月日寄達あり河額ハ

後水尾院震輪ありたの方

○五重の塔是ハ酒井若校中寄附之也

東ハ赤津西ハ鉢陀山ハ釈迦南ハ多宝中央ハ大日之

○河假殿是ハ河宮河造君の時下遷宮之

寺ありあり旧例有

○入口河門若此河門ある所本有松石地並南基

若校國司酒井若校若源忠勝朝臣清守納之はたの

方に ○河番あり此ありてあり物とて物あり

是之指をたたる楯の内不堅横之間得れたるあり

あはれ丸ありゆるとりふまらねく

○入口御門 唐獅子あり此河門を入くたたる金

徳ありのまらね徳大名亮より清守納之まらねの

○せんら濟藏三神庫せんらニテ不こころ此せんら後せんら不せんら○せんら濟せんら廁せんらありせんらたせんらのせんらこせんら

○せんら榎せんら一株せんら○せんら濟せんら厩せんら素せんら木せんら送せんらありせんら神せんら馬せんら濟せんら堂せんら乳せんら乃せんら

江せんら付せんらはせんら名せんら一せんらとせんらありせんら○せんら濟せんら番せんら所せんら

○せんら御せんら手せんら水せんら屋せんら此せんら濟せんら手せんら多せんら屋せんらみせんらうせんら奈せんら石せんら柱せんら多せんらくせんら建せんらりせんら

天せんら井せんらのせんら彫せんら物せんらハせんら浪せんら小せんら飛せんら龍せんら未せんらありせんら手せんら多せんら石せんら柱せんらハせんら祀せんら若せんら

佐せんら賀せんら乃せんら珠せんら主せんら綱せんら為せんら信せんら濃せんら守せんら祀せんら若せんらよりせんら石せんら柱せんら多せんらくせんら建せんらりせんら

酒せんら有せんら納せんらくせんら糸せんら緒せんらのせんら男せんら女せんら手せんら洗せんらひせんら口せんら漱せんら不せんらくせんらそせんられせんらよりせんら

○せんら唐せんら和せんら濟せんら華せんら表せんら 曰せんらたせんらはせんら家せんら ○せんら回せんら一せんら切せんら徑せんら堂せんら傳せんら大せんら士せんらのせんら

像せんらのせんらりせんら俗せんら不せんら知せんら仏せんらとせんら云せんらさせんらくせんらるせんら原せんら本せんらとせんらせせんらりせんらてせんらたせんら若せんら小せんら

○せんら鐘せんら樓せんら鼓せんら樓せんら 曰せんらたせんらのせんら方せんらにせんら胡せんら解せんらよりせんら献せんら上せんらのせんら儀せんらよりせんら

金せんら燭せんら香せんらありせんら并せんら阿せんら蘭せんら陀せんらよりせんら献せんらさせんらるせんら約せんら金せんら燭せんらとせんら香せんら

もせんらわせんらりせんら曰せんらたせんら乃せんら方せんら不せんら胡せんら解せんらよりせんら献せんらさせんらるせんら檜せんら檜せんらありせんら

以せんら後せんら乃せんらふせんらつせんらびせんら一せんら月せんら二せんら日せんら濟せんら祝せんら式せんらのせんらとせんらきせんら唱せんららせんら

ませんらくせんら琉せんら球せんらよりせんら上せんらるせんら三せんら十せんら六せんら粒せんらのせんら焼せんら香せんらありせんら此せんらハせんらんせんら

以せんら後せんら大せんら名せんら濟せんら奉せんら納せんらのせんら濟せんら燈せんら籠せんら敷せんら多せんらありせんら曰せんらたせんら西せんらの方せんら

○せんら濟せんら中せんら地せんら堂せんら 濟せんら中せんら乃せんら多せんらハせんら米せんら師せんら如せんら米せんらくせんら三せんら州せんら風せんら亭せんら

塔の東門とては二菩薩十二神を安置す此の  
 河堂大伽藍ホシケリとも花々の咲く相金満す此  
 長押の地敷ふるまふ心いづきも金銀を積めこ  
 りきよく宝殿の天井ふら長八間小塔りくる龍の  
 繪あり特聖永真安信等あり  
 一日暮御門陽門とも云はれ御門かほをわくも  
 禁裏の陽門を換へて建り表も随分有  
 俗不夫大匠と云いづきも極彩色之款をえくる

へく正の人れおと一なる鄙人おをひら  
 うどもいらく老翁ぬりゆると不審しけりも御門  
 御門の清額ハ 後陽成院わりのをきおさるひ  
 ての重縁之俗不初額門ともいふ想じくこれ  
 御門の結様舌場ふ及びかく筆鋒にものつ  
 かく一彫物わりくかまへんもに琴棋書画周  
 公且鉸拐費長房盧敖琴高阮籍嵇康豊亨  
 王子猷孔子教回をたぐりめを対之矣四友の信九哲

此玉子とく悉く化さふ等由なむに相獸ハ豹虎  
 純鯉鱗獅子様りりきも角木の端ふらぎめり  
 わらひそのまふ多りける由ありまら風屋乳  
 雀そ外名も安及ぎる夜多きなり秋虫の禽獸ハ  
 不ふ及むにりきも極彩色之皆に滅金の如  
 りのむまむと極いほあとお光りかやましく夜を  
 日おほぬ風揚るり中の通りは天井の純り  
 将野探出守信等々四の間の天井は天女七畫

又た右河田廊折はへ一石間余わりあり由の樂  
 天の友子獻が此君と極一の文をこのむれ本を  
 とまらぐくかきまらぐ一河門をへく庭上へ補  
 きたる粟る六緒川又鬼懸川はよりりき一ありあり  
 トくたれりこみ  
 ○神樂堂 くれ二奉の 河祭礼の四時あり  
 出濟りるへ日トくなれ方  
 ○神樂堂 毎日八乙女出仕は神樂試奏は日ト

くあらびく

○旧護摩堂

○沂唐門 素本造り 四柱へ上り龍下り龍

為竹の彫物かおれあげし向の破風の許由雲

或は七賢七福神木の彫物あり天井へ天女の彫物

此門の彫物より唐本式以て當りり熱しそこの

和の彫物より竹寧あり半へそ一枚の板を

ゆへに構ふものありく何層と細やうるる木にも

木を用ひて樓飾ある木少も物し減ふ細工妙

も神小入りの沂屋根に上る唐柄を急と

云むし板おけり沂門のたな

○沂瑞籬 此彫物千草万木花をとり形

以しくわりの色をへ木に骨を柱び轉づる風情

松山康がをせし山浜木柱を柱しそ茲に

○沂神殿 鈴三石ふりしり素清の男婦是

より糸しなるく沂神殿の内たな

東照宮圖

外  
野  
五



名  
知  
証

十一



所着座乃間あり清兼座の二十六秋仙を以てら  
 る事ハ後水尾院宸極あり繪八王佐左近將監等  
 あり也 御着座の間ハ亦間とも是朝の名がく  
 香樹と兼めく造り多きを偶々室ふ入りの  
 漆ざるふ衣かの法より芳しく椒蘭杖かしくは  
 しくと乃白ひ敷日除く存らば扉小鳥雲を  
 羽乞の敷金玉を丸め眼くるめきて飛翔んとす  
 るのりさわりひわり想とくこの 御宮の権美

いう那る辨士も舌状捲げ況拙れ等とて  
 書とく座をにあらは  
 △河本社 柳當河社ハ人王百有余代  
 後陽成院 後水尾院右院の河字に當て天下の  
 武將小備くせむして吐振の旁を躬にしく四ツ  
 の海八島に卯高藤唐土のとて  
 河東とて作をなすふるはたうりた河治世年  
 久安しく元和二年四月十七日河壽年七十二歳

ありて清他界の事と云々 義眼大師と縁ト云  
 清光の約ありて河山王神道と云々 奉りなる  
 清光の時 勅使下向  
 東照宮大権現と尊号を贈らるる事 清代  
 天下を掌乃内ふべきを授けし是れ尾のいと長く  
 清の覺歳重かさなりて泰平と云々 奉り遠き  
 小成し給とん申すこと云々 奉り社之神徳云々 大  
 ありに云々 奉りものあり云々 清を地ハ奉り 摺瑠光

如来の應作 相殿ハ摩多羅神山王大権現あり  
 云々 東照三社ト云々 奉り 六月一日九月  
 十七日 清神事あり六月一日ハ奉幣使を申し  
 後ひく宣命云々 奉り 清光を云々  
 大石丸二人奉勅別 清光禮云々 固あり 當社  
 の清光式云々 奉り 奉り 奉り 奉り 奉り  
 〇 奉り院 清光社の後云々 奉り 奉り 奉り

新編

十四

子 紀より新神祇殿法室を祀り凡衆の系ねと侍  
東照宮宮 祠正四位松平容保毎朝被詞を奉捧  
早神借を侍らるるあり

△新宮の鳥居 河額正一位勲一等日光大権現

とあり一品宮公寛親王清康殿あり

常行堂 中なる八宝冠の御陀四菩薩あり

摩多羅神立あり此堂不頼朝公の骨納あり

おふとて修不頼朝堂より凡此堂八人王五十九代

宇多天皇の河字寛平五癸巳年単剣あり

わらわ指を折ふ八百五十有余年不及びり

○法華堂 中なる普賢菩薩鬼子母神十

羅刹三十番神傳教大師の御影あり此堂

め六人王五十三代淳和天皇の御字長長二巳年建

立あり此堂不傳教大師御影の法華經一部納

ありありとて此堂の間乃あり是と二所は

△慈眼大師堂 天海法府あり寛永二十癸未年

十月二日入寂あり勝道上人より皇山五十一代  
 の山座主あり中島の沖開山耶りん  
 東照宮の山座主あり  
 起し御ありびとふ大師の御徳ありつくはつて  
 治ふゆあり今の両大師の御一御あり治相殿の  
 和ふ御あり水屋并日御の御徳あり大なる御あり  
 上りし御あり御徳あり御徳あり御徳あり  
 井の水○福ありの御あり○石佛の御あり御徳あり

の方ふ山田御座主御徳あり  
 本照院宮 文遠壽院准三后 解脱院宮 大明院  
 宮御石塔あり御徳あり 文殊堂大師乃御徳あり  
 求聞持堂あり御徳あり 經藏御徳あり  
 大猷院殿御徳あり 慶安四年四月廿日御徳あり  
 皇山ふ入御あり御徳あり 先皇門ふ仁王あり御徳あり  
 二天門御徳あり 後水屋院御徳あり 御徳あり  
 門御徳あり 御徳あり 御徳あり 御徳あり

浄土の花のまがら あんぎや 東照宮ふかあ とうしょうぐう ありりの  
 彩色 さいしき 赤玉 あかたま 玉 たま 織 おり あり あり 浄土 じやうど 権 けん の の あり あり  
 回徳 かいとく 大 だい 名 な 元 げん 献 けん 上 じやう の の 名 な 院 いん 金 きん 幣 へい 貳 に 百 ひゃく 基 き 礎 そ 有 あり  
 朝鮮 せうせん よう よう 献 けん ぎ ぎ ぎ ぎ 金 きん 幣 へい の の 水 みづ 浄 じやう 土 ど 権 けん 有 あり  
 法人 ほうじん 神 かみ 禮 らい 了 りやう 内 ない 西 せい 水 みづ の の あり あり

○ 浄利 じやうり 不 ふ 能 ねい 光 こう 院 いん 毎 まい 朔 しやく 淨 じやう 臘 らつ を を 修 しゆ ぶ  
 回新 かいしん 官 くわん 大 だい 権 けん 現 げん 淨 じやう 一 いつ 新 しん 高 かう 國 こく 幣 へい 中 ちゆう 社 しゃ 二 に 荒 かう 山 さん 神 かみ 社 しゃ  
 少 せう 後 ご 列 れつ 八 はち 棟 とう 造 ぞう り り あり あり 為 な 不 ふ 神 かみ 殿 でん あり あり 日 にち 光 こう 山 さん 大 だい 権 けん

現 げん と 稱 しやう 一 いつ 名 な なる なる 皇 かう 途 と の の 大 だい 己 ぎ 貴 き 尊 そん 社 しゃ 以 い ち ち を を  
 仁 にん 明 めい 天 てん 皇 かう 比 ひ 嘉 か 祥 しやう 年 ねん 中 ちゆう 嘉 か 貴 き 大 だい 作 さく 海 かい 建 けん 立 りつ  
 あり あり 凡 ぼん 國 こく 中 ちゆう の の 大 だい 社 しゃ あり あり 一 いつ 東 とう 鏡 きやう の の も も 有 あり  
 一 いつ この この 不 ふ 能 ねい 現 げん 乃 の 淨 じやう 利 り の の 益 えき 五 ご 穀 こく 成 じやう 統 とう 福 ふく 徳 とく 國 こく 備 び の の 有 あり  
 神 かみ 形 かたち の の 万 まん 民 みん 奉 ほう 一 いつ 作 さく ぎ ぎ 有 あり ら ら 一 いつ 有 あり 一 いつ 有 あり 一 いつ 有 あり 一 いつ 有 あり  
 神 かみ 室 むろ 不 ふ 稱 しやう 一 いつ 切 き 丸 まる 其 その カ カ の の 何 なに 有 あり 其 その カ カ の の 何 なに 有 あり  
 五 ご 尺 せき 余 よ あり あり 其 その 大 だい 鏡 きやう あり あり 其 その 小 せう 山 さん 判 はん 官 くわん が が 一 いつ 有 あり  
 澄 じやう 甲 かう 其 その 外 がい 玉 たま 簾 せん と と 一 いつ 有 あり 琵琶 びわ の の 桐 とう 板 ばん 珠 しゆ 一 いつ 有 あり

田記

重なる百目あり 新編公海新書是ハ九州恭儉

道成乃初指らるるあり 屋外海宝物あり

これより一六九一に中江色勝道上人控取

以對面比とる家の袖に絵書あり神形由

此社同小納りあり

毎年四月十七日祭れ之社乃神樂を飾り

並供奉乃氏子の妓女を祭日より諸君あり

不玉と酒ひき席ふ業をとりて行新ひは花かす

不作も真ありと 神意とらるる 神樂

中より新書あり

そと社向ふふたの龍光院表門あり是より

右の方滝の尾乃入る二荒山より滝尾を十二丁

余り小坂をせり中をどれ

○薬師堂 此より君水出るるを色と汲て目と

洗(む)陰翳を和み賜る是れより同洗せし

○行者堂 坂の向ふあり中を後行者

坂下り藤原 ○石橋あり。是を藤原橋と云。これより

大小使禁制の石あり。是を石上全一丁と云ふ。

△山王社 向拜造り形。家ふる居あり。此社に

嘉祥年中。是より大所。山造り。聖真子。古禮現

出。和野口村。山王と云。社乃内あり。

○不動堂 本宮。二童子。も小蓮。葉の作。之社

向。八滝尾。より。瀬之。石。尾。本。成。堂。り。て。中。程。小。○

三笠。赤。倉。大。神。の。石。社。あり。其。の。方。に。○坂。中。不。動

石。佛。あり。○慈。野。松。と。云。て。著。供。養。の。場。あり。此。其

○河。別。石。此。亦。あり。日。光。青。と。云。て。食。物。を。中。む。若

あ。ま。ぎ。と。云。て。食。物。を。中。む。強。者。と。云。て。か。る。が。ゆ。ら。ん。り

摺。持。る。と。の。者。乃。具。あり。と。云。て。懸。り。か。き。り。又。た。云

せ。教。あり。と。も。あり。懸。と。云。て。別。取。と。云。て。い。ふ。ふ。あ。よ

を。氏。坊。中。町。方。に。云。て。も。は。事。あり。佐。和。より

来。り。ん。と。云。て。め。く。年。を。と。も。人。ハ。勿。論。さ。り。ん。も

河。宮。河。靈。屋。法。代。森。の。田。大。名。元。大。寺。の。末

御靈屋

三荒神社



竹葉堂





客の馳走のこの版を強き半古例ありき  
 日光の地はく糞子替れ新宅本の親系  
 如斯く日光素と行ふ是の社不故あり  
 てそ人乃多の甚新構と明くし  
 の地系素新をふ室一とせありき  
 ハ此別不あり

○旧幕府の辰日光素行不半あり  
 の茶談あり

○瀧の向伏素新谷と云それより

○石の寄居 (○樓門)

○河本社 向新造り滝尾神社社所社人王

五十二代煥峨天皇の法就あり

富山のありし形も君侯の富社不あり

相済神宝の弘法大師の筆せり  
 不動尊の筆不指の名号秘するの仁王

素くもるとい面えんがきと云面これ

面とそ火ゆる玉水ゆる玉ひ糸宝おとれあり  
西のうこのりまどい

○子種石 おふき名あり子ねさ人ひるふり時

いおあらび利生ひるさくうとをさう

○泉が河酒池 池池裡七尺母どありむうーいお  
酒涌ゆる和とまつふふおあく海の香めるま水

りるい中ふある石社の糸式天照り

○云々松 奈社の後ふわりこ社の神本ひくまも

大木あり

○鉄塔 是の平中郡納経乃和那りこれ

より下向をたのうこりふ○飯盛松 在松古

本あて枝あり木の松とちがひや成りこーか

ころ○手掛石 けるいむうー橙祝の由もを

いあさるをふとく物左の方の橋を川くむふ

のまきいふ

△市山 此山見山門天まを流ふぬぬの鬼

門はわたりて後にはありとも一月三日は御日  
 おてふ清浄集まるとの山つとて○氷岩とて岩  
 月も氷も又ほるとの山○五動石あり  
 野山ありて○七滝あり氷上なくとて七和  
 小滝あり此和一人ありて  
 ○天神社 滝尾の中向方右の山あり  
 石の如くありこれハ寛文元年辛未年二月二十日  
 菅原大方居士法眼依出古宰府の聖蹟と

うつとく繁まり稍程延宝七丁未年六  
 月廿六日彼の商伝祐石の社とて造りて神威  
 築家小森一△十王堂  
 △地藏堂 宝形造りあり此和を仏岩といふ  
 かつるハ産像小く運送の作あり并後送上人の  
 由新門十才子蓮の清教安堂以上人ハ地藏産壇  
 の本礎ふきとてけ和お立法ふ故小崩山堂共  
 りあり○同和裏上人の清基所はありあり

養あり上人の以背の中宮相上野清不納あり

△御産宮 向轉造り尚社ハ本地善賢菩薩之

以ふおわわく懐胎の女と云れども安産あり

るの奇妙形りは和のこまふ

△白山控現 本地大形十面と云ふより

へり

△小玉堂 多店祇殿あり尚社ハ天神皇代神

有り本地金輪ハ社のいそを秘事と云ふ

かこ一是より二丁目どけく奉宮の境内ハ入石橋を

とこり奉本造り乃堂ハ

△四女龍寺 宝形造り奉宮ハ金剛童子

採地護摩和後道を安産と云ふ尚山のいそ二人

住居あり

○三重塔 本尊 釈迦 文殊 普賢

○御本社 本尊 奉宮

味鉅高彦根を大同三戊子年後道ハ和

幼清あり 尚社へ宇都宮明神と清一辨あり  
 別あり 明神の家にも日光山 嘉現太郎大明神  
 仰ぐ 高法神へ 武運長久可矢の  
 清き神あり 神法為大なる中中り 押さき  
 書ちりえん 恐おきを記し ぬいど 凡野比大社  
 あり 神室へ 天照太神 法西作の十一面観音中  
 形の蓮の糸に 織れる 切枝 珊瑚珠 とうとの  
 糸く あり

○ 中より 神橋の 下りて 西町 一坊あり  
 大谷川の川端を 通り  
 又 是より 水の 方 あり 川を 渡り 七町 経 行 七 天谷  
 津院あり 真雲院と号し 田當山 所  
 宮様 津建 立 鐘樓門 本堂 兼之 社 権現 之 一切 經  
 藏 亦 建 王 廣 外 幽 閑 の 靈 場 殊 殊 あり 出 乎  
 修 小 の ぐ じ 津 家 へ 戒 光 殿 一 品 法 親 王 所 在 途  
 △ 南谷 西谷 善女寺谷 あり とも 神橋より 西水

ふありた法七八町あり是より西町入りづるを町と

○四町町 ○原町 ○小袋町 ○本町 ○大工町

○板橋町 ○蓮華石町 此町のより小田母

原町のこづき小ありこのち

一山の菩提所之寺内小 ○釈迦堂本寺を住像の釈

迦文珠 善賢真心の住化之并慈眼古跡

大猷院殿 殉死の諸士位牌あり堂

の碑に殉死の石碑あり堂あり常任不

急の念佛と修を堂はうしあり

○愛宕山神社 号形妻日此化といわ成出町あり

○八幡社 出町の縁寄あり兼小 ○お地蔵堂 以堂

のうしろを廻り宗光寺へあり神橋より宗光寺

二十町余あり此町入口の狭小 ○延命地蔵堂を位

七八町あり ○池石池石の上小不ありあり有友小

く之屋又俗ふまむしけづきといふ名馬いふの中より

出あり馬は蹄の跡ありとぞそれより守り給ひて若光

の地不入の入口

△二本松 嵩山一の大松あり大い二年をかき

べー乃を授きく二ツの本お對せり

○河津社 若子社ハ下照非命ハ地赤林天

出社の弘仁十康子年弘法大師河津開基あり

河津物ハ十二の手箱白身の鏡その箱敷多し

たれくさ小流ありその源ともう未遠く梢あり

てんぐさしきも敷布の布を晒がごとし滝の

南ふかふる山のさだ蔵岩のたのびくわらふ石工

災起乃四字を空海もく並ふこの地より

上ふ○二子山○大黒山もふ入く○富士山あり

井山より富士のき根えゆるたわけを○川俣は

温泉ありゆら女人の入湯あり河津社より

ありてあきさうりゆり京町より本町大工町を過り

そきより大谷川の橋よりさきむ向の赤とを小町有

△善雲寺 神橋より乃法十三町あり

本寺のいゝ意覚大師之涅槃の釈迦の寺のあひた  
川ありこれより行く岩の上

△彌生堂 此和合満が淵あり向ふの岩のうへふ

動はる佛淵を喰んでまじり此岩の淵の岩をさる

憾給の梵字ありとれより行くたれさる山名ふ○

不辨の地を教をまらび此和の川端ふ○日天閣

此閣より眺望まらる所の絶景あり有るなるとん

ら此院花溪は水有花廻ら勢を香檳の筆のゆら

意城の待料はるがら茲み得るうま向ふのさる

○赤擲くまのふのさるむんふーまきく閣の果ふ

○岩堂大らむとむとむとむとむとむとむとむと

納むその上小羅ふ子の書ける碑あり例ふる仏のま

花のりて花のりて花のりて花のりて花のりて花のり

笑ふより花のりて花のりて花のりて花のりて花のり

名わらるるわらるるわらるるわらるるわらるるわら

仏と板小梵字名号本書してて来く信義をさるる事



ありまて川薩頂ともなせねと園東たき野らり  
 藤小紀別と舞心の出流けも長くあまふ  
 地ねりいぬの東ふ○素野滝めつと○平石  
 三のまひ 本地薬師如来金剛童子の像あり  
 ○金剛山 妙上小化瓶の者と入塔  
 伏の岩あり秘密勅りのた場まうけねらん  
 子たふゆつとこの流ぐらうとまき山麓にらん

△招き山これ入奉勅行のあふり勢と氏  
 小見下 勅へ八塔天神のませむふあり  
 くらくいの死つと

△中宮祠への道筋

但神格より中程も道と里余

原町あり田母沢の橋とつとつと山向

○蓮花石町坂を登りて○町の中むとふ○蓮花  
 石ありけるむう 猪道中程も一通りせむと  
 中さらひ路ふとつ(同)のまうけに名付て蓮花

石とりのたの方本まのうら

△十八王子 是のけ町の熊守くもくうこの余たの

うふふる二良村とまおわの世村ふ△サ糸師堂

かふるま糸師二喜糸十二神一王集糸婆まあり

神ののまあり又道元石町より二所余のたの森

へ△大日堂 中ふる石神の大日あり千神佛とあま

は日おみ地神堂ありおみ地の地形 鬼の付ごとじ

乾おびと向ふ水清くま縁ふくとむ糸出の地あり

偶時おみままらむむねまおれも長坂あらしあり

さあ電ふあまく世一の地一又大日堂のあまらふ

おのくくた法二十町行く

△裏えが陰 このくらえが陰の敷さ一おとあま

うららより敷のSandoのひのたまはま

おのち一おみまあまのあまSandoのあまあま

よらえまくよらえまのあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあまあまあまあま

深むる瀧いふおきさるる谷れり

○ゆき沃橋ありむふふ○きんれ子の足痕あり

石ありたのころ○鞍掛山○頼巡山ありゆき沃

よりいへく○香丹むら地蔵堂ありそなる清滝

村△清滝寺 山号勝福中云 かな子安の地蔵あり

聖徳太子元勳ありあり寺ハ妙道院本寺あり

つるがゆふぬら瀧の位持い寺いへく越年あり

内○清滝神社 いは神ハ天竺梵字の山あり

金は良神とわがら擁護の清神ありい美の屋敷原

風をまきさるる瀧あり○清滝と云それハ人里

ぬの丁地七○観音堂 かな子観音あり務乃

上人中務寺 さまの観音のうら本をりハ彫刻あり

清長七人むらりの田中務寺 女人禁制ありいおふ前

まをさ(男女ともハ)縁と結をなほさふあり坂志

十八番のれを細る之堂のた乃このたハ○豆尾村と

云く洞山あるあハけたあり是よりハ里やどあり

尾道通り上利へも行形りして銀の堂より木のさか

三丁と云く○水汲村これより坂を登りて社有

名を○牛王坂といふと昔より牛王様といひ

○馬込村是より日光より三里ありの末と云

○深沃茶屋あり坂は堂ありと云く

大平

○不動堂石所くる返よりと昔を津の市頼而

の坂之是より坂は丁と云く湖水あり○太

と云く○牛石あり

つらふてはるぎと云く○金三丁

○初津門 此所下流へ交りて春信は軍駕

より赤巻をぬぐと云く

△中宮洞社勢和旧補陀落山中禪寺是なりこの

湖水あり赤巻の者拵難と云く形り此所の殊

新永胡のけと云く城はもろくたると下

住者も此化に別ていぬ候入ると云く

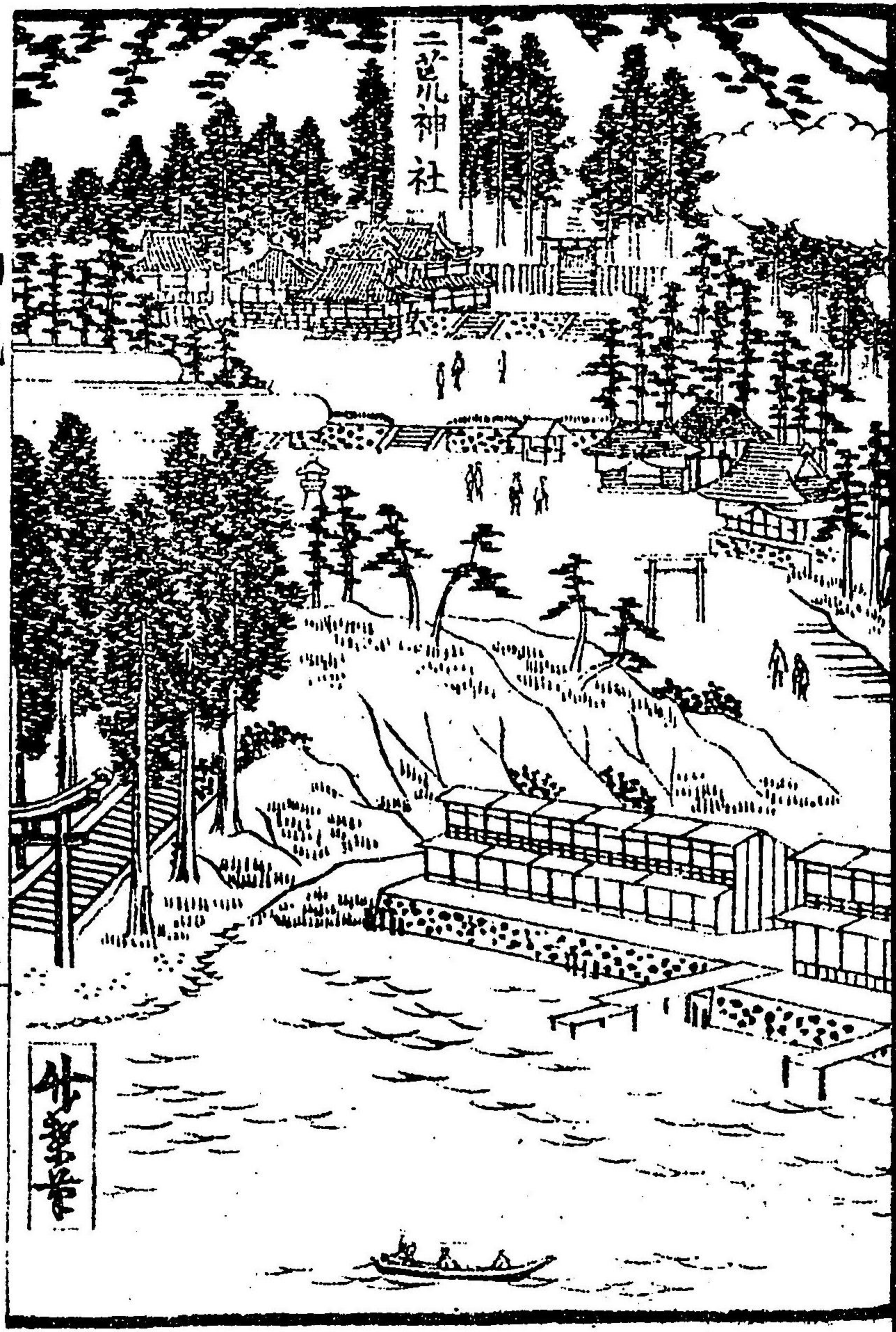
初て東奔する人かたふるるる老なりとも汚濁の  
 心暗て信ふ行ふ結を以て半なりし其妙なる  
 半澄らんともさるるふまは那く紀さるる半は立和  
 ちりーさふい湖水長二里幅一里四面ふ茂林修竹  
 わけく湖上ふ盡せりいどもよ葉ひとる見水面よ  
 浮るは底まで深し深ふ此和のふいさるる湖  
 乙山内ふ古湖とつありその水山に流るる由ふ四十  
 八湖ありつるさふの頂ふ多く湖わら半壽代の

又山形りやそ湖の岩ふ○深の地流とてありこれ  
 ころ木の大も名あり○鐘樓○妙見社又天王のまも  
 りふ神殿あり本地能善菩薩なり  
 ○立木観音堂 なる半手親善法長一丈六尺  
 又四天王の像あり傍に上人立木とてその像彫刻し  
 終ふる像板東十八番のれ和なり善信の人開帳を  
 終ふハ満終る一石けく開帳まると凡化は流例  
 あり又像あり五大尊の像弘法の他縁道上人の

中禪寺真圖



三尊神社



外

沙新あり

河本社 前以作版あり尚社大権規の日先

之社の本社はく中地孫院子馬改延暦年中

の清造管あり神宝ハ 藤悉地煙一卷 金堂の

法華經一部 八葉の鏡一面水牛の香爐 龜舟の

筆葉一管 海竜王の赤衣一匹 善喜曼陀羅の書

栴子の漆板 陰乃上人沙弥生の時夫より降るる

錫杖は平ありあり 濟一新より國幣中社二荒山

神社不致列毎年一月四日武射の祭あり

あり社司為山として上妙赤城は方はむうり

矢を放つ赤城ハ高社の神敵ありといふは別

赤城用神の藤に多氏子たは日矢とぬきの餅

と夜網の矢を接しりうあまふよりて赤城の民

子は山くまもまはあつて中社赤城のまに

二荒山登り山田七月一日より七日迄を山にこまなり

○二荒山 又黒髪山ともいふ 此山吾妻は高野のく古神

一 地をたぬく之積雪長きふしとて人の乳  
 と儼然山頂ふ ○ 三社を巡りて毎年四層  
 七月七日間お尋ねに定むること九月終りより行屋  
 小籠り種この形作ありて登山一に社を神  
 ともつる信公おきり人の身おの果縁にあふ事  
 しくはれしつゝ一に荒山た二三丁をせれど  
 ○ 戒壇堂 湖水のむふもてさうふんことせけ  
 ○ 秋の湊 あきハむり一に神軍ふ対縁ふむひ

此れ不汚凱陳ありて清平の神をたす百案  
 うゝむおふのふむくおめ甘ぬるとと 幸なるハ吉祥  
 天幕ふ縁勤菩薩金剛童子ホあり又花供の入  
 峰山伏の岩あり物向ふお巻くおえのふ ○ 寺が崎  
 茶師堂 ○ 日輪寺 五大菩薩の縁乃の法教あり  
 ○ 上野河 湖中の湧之丁四方何どあり縁乃のおん  
 骨はあふ納りせり  
 ○ 梵字石 ○ 龍陀石 ○ 俵石 ○ 千手が湯 記る



後乃の化之。○毎年四月一日より乃俗流禪願

とて船を乗居るの形を辨せむる信を堅固に

祈禱あり此所の右に別におよ一夜花より船を乗

年の刻よふに帰るに候きの風景をいふに似たり

御めふりおぬ候きなり ○風風水 ○紅葉の浦

○屋下の滝 ○大橋 ○大庭 ○宇津江の滝 ○常盤

が池 ○おぬお茶屋あり物なり ○赤沼が京 磯崎が

比京二里四方もあらん古しくあふの清神の古哉

切くともふかきかゆに似せり ○弓張橋 ○幕張

ふまどてあり此所の橋一番ありむらゝ橋あり

この橋は日光権現の神鳥はく年毎お子城をとも

そを離るゆづりへゆともあきけ此所の所ありは終ふ

此所を去るにむすくお月のにけ所をよきとありお

花を風おふららきて暖かきかやう中へ暖風

と得く一時お并られたる白枝を交へて付あり

ぬまおきよとあらん

司人にもたれ山里のこころ死外のちりまほを言はし  
 と伴務のよめるもなりひからしく相いさくう○湯滝  
 とひまを言えくあざひふ近づ三湫の例を述りく  
 ○湯元一竹 湯子家育二月中旬より九月終  
 迄中を各宿ありてありておろ自由なり湯はあつ  
 ○所新湯 ○滝湯 ○焼湯 ○釜湯  
 ○自在湯 ○中湯 ○茶師湯 ○河系湯  
 以上湯の品八色 湯坪十一あり

右の湯は色も種も其類の志あり自余の病行ゆても  
 考めざる湯坪ありてく其類之湯治の家年毎種集り  
 此多し○大真子 ○小真子 ○鋒山  
 ○帝釈嶽 ○大王山 ○雪山 ○三笠山  
 ○赤倉山 ○鈴ヶ嶽 ○温泉嶽 ○女峰山  
 ○太郎嶽 ○月山 ○白根山 ○湯殿山  
 二荒山の水のこほありお解の湯湯殿山を遷てて  
 湯殿山といふを初て社不事ありて裏を湯のたれを通りて

○華嚴院 是ハ中宮洞内所大虎よりみゆるは  
 け所ハ湖水の流形りまき敷百石の石を曝せし  
 細くそまき中まてつらぬき銀漢より洒出る  
 うとうこのめりまきより湧く銀河倒掛三石梁香  
 盧瀑布遙相望と作まきもゆくとおもひまき  
 る上より大木まきり滝俾まきゆきふる小目くるめき  
 せびるふる小あきまき流のまき奇樹異村の花と  
 まき流小まきまきと世にまき○大平不動堂のまき

まきこれより下向てまきまき流り水沢村のまきまき  
 ありて里ほどはこまきより大日堂のまきまき  
 右日光異地津利へくまきまきまきまきまき  
 遠留まきまき巡りまきまきまき

○日光名物

- 慈心鳥
- 栗丸
- 岩茸
- 約多
- 中ぐと
- きの茸
- 推茸
- 物
- 山茸
- 籠子
- 自然葛葉
- 山松花

●胡鬼の子 とさこ 茶のこぼれにまわりまわりのひんがし

●後水尾院御製 ごみづおの 「はくしものをまわらんとさのしは  
くしもの月をくらみまめ

●草花の歌 くさなな ●石南の花 ●白根茶 ●白根人参 ●黄連

●石南の花 ●白根茶 ●白根人参 ●黄連  
●石解 ●百合茶

●日光茶 ●日光生茶

●膳 ●曲物 ●挽物 ●指物

●日光山名細記尾

藏版目錄

一日光山名細記全壹冊 一日光案内記小本全

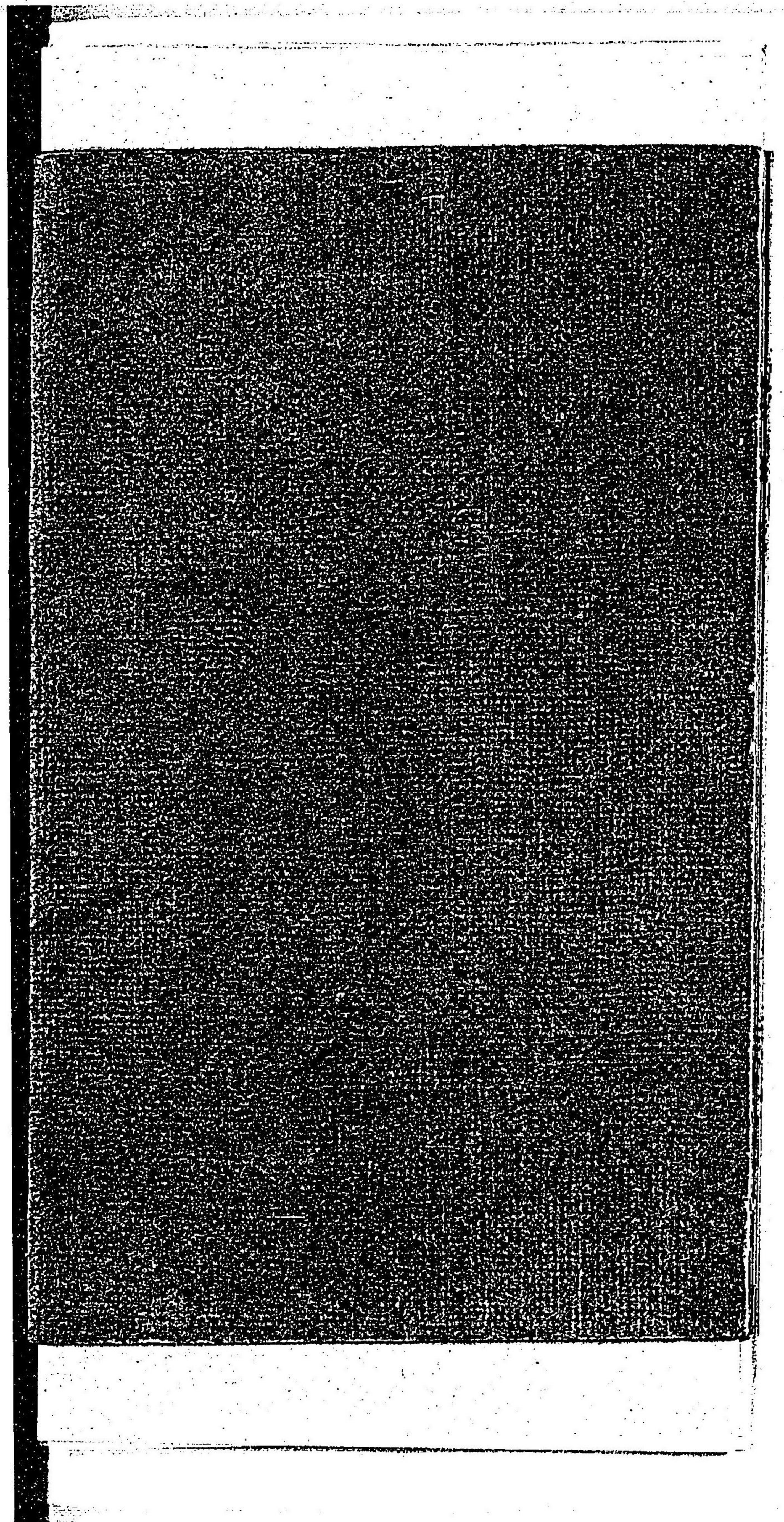
一日光山内繪圖 西ノ内  
二枚継 全 一東照宮六將圖唐紙摺

一同全 圖畫技摺全 一改名勝十二景壹袋

一同名細大繪圖上等品全 一光両社大錦繪類四枚續

傘

編輯兼 日光鉢石町  
出版人 鬼平金四郎



024244-000-6

291.32-0681n

日光山名細記

鬼平 金四郎 / 編

M14

ADC-1411



291.32

0681n